

新し地域づくりと福祉文化  
3  
日本福祉文化学会編纂委員会  
編集代表・磯部幸子・島田治子・マレー寛子  
発行・明石書店  
定価・2200円(本体価格)

この本のタイトルが誕生したきっかけは、第20回日本福祉文化学会大会(東京大会)で初めて企画された分科会「地域に根ざした福祉文化の構築」にある。

この取り組みは、日本福祉文化学会がこれまで取り組んできた、人が人として生きるために欠かせない福祉や文化に焦点をあわせ、人間が生きていく中で編み出される音楽やアート、さまざまな実践活動を取り上げ、また、自らも創造して新たな行動を興してきた、そうした学会の歴史を踏まえつつ、これまで十分に取上げてこなかった「地域社会にある地域文化、その地域にしかない独特の生活文化」などに焦点を合わせて、そこに住む人々が累々と築いてきた生活に根ざした福祉文化・生活文化を、あらためて見つけ、そこから学ぶことに意義を見つけ、次の世代につなげてい

こうとする新たな取り組みである。今回の長崎大会においても、この分科会は継続され、地域で実践活動されている団体や個人から応募も多数いただき、実践活動発表がなされた。

この本は、こうした学会の新たな方向性と合わせて、今日の社会福祉分野において重点政策として進められている住民が主体となつて自分たちの地域社会を創つていこうとする動向を意識しながら、理論編と実践編でまとめられている。(第1部(理論編) 地域再生と福祉文化)

ここでは、地域社会の再生や新しいコミュニティづくりと福祉文化の関係、さらに限界集落の再生と福祉文化のつながりなどに触れ、さらに、地域で暮らす人々に視点を置いて人々が織りなす生活、とりわけ次世代を担う子どもたちの生活環境の現実が子どもたちの生活のような影響をもたらしているかに視点を置いた問題提起、市民性の創造と福祉教育の果たす役割など

広い視野に立った理論と実践の問題提起や課題提起がなされている。(第2部(実践編) 福祉文化活動最前線)

ここでは、第1部を受ける形で、現在実践活動の中から市民参加福祉文化活動や福祉施設が中核になって取り組む地域文化活動、地域の変化に寄り添いながら、ネットワークづくりによって住民生活を支える住民活動、地域伝統文化の継承活動や、地域文化に根を置いたサービス活動、さらに、福祉教育の視点から福祉施設の新たな取り組みや地域住民や専門職の育成の実際、障害を持つ当事者活動などを取り上げている。

書き手のすべての方々が日本福祉文化学会の会員として(この原稿を書くにあたって入会いただいた方も多数)現役活動家という、まさにホットな情報が満載された「福祉文化活動最前線」が見どころ。読みどころといった本に仕上がっている。ぜひ一度手にとってお読みいただきたい一冊である。

2011年度から「福祉文化研究」投稿原稿の送付先が下記のように変更になります。

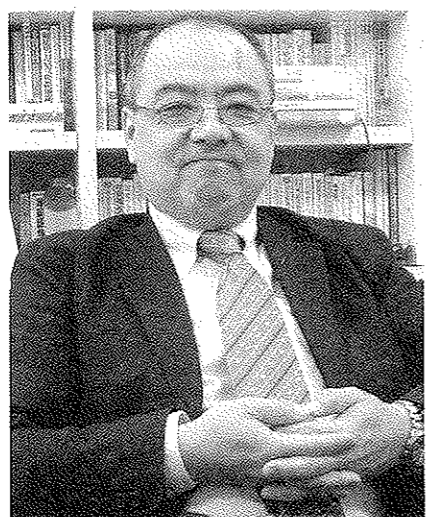
〒165-0026  
東京都中野区新井2-12-10芸術教育研究所内  
日本福祉文化学会事務局内「福祉文化研究」編集委員会  
なお、締め切り期日はこれまで同様8月末(当日消印有効)です。

2010年(下半年)事業報告

- 福祉文化研究編纂委員会  
福祉文化研究20号の編集作業
- 企画委員会  
長崎大会にて「地域文化の福祉的実践」と「研究と実践の融合」のワークショップを開催
- 広報委員会  
学会ホームページの充実  
福祉文化通信第65号発行  
メルマガの発行
- 研究委員会  
「新・福祉文化実践シリーズ」の第5巻の構成案検討
- 国際交流委員会  
9月11日・13日「国際社会福祉フォーラム」(於・四川省)に参加
- 北陸ブロック  
2月19日「おもちゃ福祉文化講演会」(於・燕市児童研修館)の開催
- 2月20日「グッド・トイで遊ぼう&出張おもちゃ病院」(於・燕市児童研修館)の開催
- 関東ブロック  
12月3日「これからの保育・介護施設と福祉文化を考える」(於・救護施設村山荘)を開催
- 関西ブロック  
日本福祉文化学会関西ブロック研究会を開催  
5月17日、7月12日、9月18日、1月17日
- 中国・四国ブロック日本福祉文化学会  
1月23日「第12回中国・四国ブロック大会」(於・徳島文理大学)開催
- 事務局  
11月13日「スウェーデンから学ぶ福祉文化」(於・立教大学池袋キャンパス)開催
- 2010年(下半年)事業計画  
● 関西ブロック  
日本福祉文化学会関西ブロック研究会  
2011年3月19日(土)15時 阿倍野区民センター  
終了後は大阪大会のオプションホテルツアーの下見を兼ね、西成地区散策
- 広報委員会  
学会ホームページの充実  
メルマガの発行

# 理事紹介 日本福祉文化学会 会員のみなさんへ

理事からのメッセージ③ 小池和幸(仙台大学)



して様々な文化。実践、研究の切り口は様々である。福祉文化通信第63号の河東田博理事・学会会長のメッセージ①の冒頭に今尚「福祉文化」概念が分ならず、何を拠る所に学会活動を行ったらいのか、分らないと考える人がいるのではないだろうか、とある。実は私もその何を行つたらよいかかわらないでいる人に入っていると思うのである。

現在、私は、福祉文化実践報告編集委員を担っている。本職は仙台大学体育学部健康福祉学部の教授である。理事の初仕事として「福祉文化実践報告集」第4号の編集を行った。「福祉文化研究」における論文のテーマを眺めてみると実に多様であることが分かる。「福祉文化報告集」の報告事例も同様である。人と生活、地域、社会そ

の明日を考える。高齢者の生活文化と生きがいのために。が開催され、私は何人かのスピーカーと一緒に「レクリエーションやアクティビティはなぜ必要なのか」のテーマで緊急提言を行った。レクリエーションやアクティビティに関するテーマは福祉文化学会では比較的よく取り上げられているテーマである。この緊急シンポジウムが行われた背景には介護福祉士教育におけるレクリエーションの専門科目が新カリキュラム施行から無くなったしまった事も要因の一つになったと思う。「レクリエーション」を考えるとき、当然「レクリエーション」の概念についての理解が必要であるが、レクリエーションの理解という点においては福祉文化と同様

# 福祉文化通信

～well-beingへの道～

2011.2.28  
vol. 65  
●編集委員 遠藤美貴 稲田泰紀 河西正博  
●デザイン・印刷 飛来社

日本福祉文化学会事務局 〒165-0026 東京都中野区新井2-12-10 芸術教育研究所内 Tel/Fax: 03-5942-8510 E-mail: fukushibunkabito@nifty.com

# ブロックからの 会員紹介

九州ブロック 菅崎康範さん

## 福祉に求められるもの

私は大学では経済を学び、長く中小企業の指導育成の業務に携わってきました。最近では、経済産業省の委託事業である「地域力連携拠点事業」の応援コーディネーターとして、中小企業者に対し、各種施策の紹介、情報提供、さらには企業が抱える課題解決のための支援を行ってきました。

私がこれまで取り組んできた事業活動に求められたものは、次の三つの活動でした。

- ①多くの企業や事業者に広く利用してもらおうこと
- ②利用者に満足してもらおうこと
- ③確実な支援成果を創出すること

今、福祉に関わりを持つようになって、対象となる人に違いはあっても、求められるものは同じであることに気付きました。

ひと頃、福祉施設、特に知的障がい児の関与施設といえば、人目につかない場所にひっそりと佇まい、息を潜めて暮らすような暗いイメージがつきまとっていたように思います。それが、環境の整備や個が大切にされることにより、個が輝き、生

き甲斐保障への助走であり、人としてベースになる部分が構築されつつあります。

このことがまさに、志賀俊紀理事長をリーダーとする私たち「ほかにわ共和国」が目指す創造的福祉文化の実現であり、道半ばではあるものの、これまでの取り組みを検証し、処置・改善を行い、さらに新しいものを創り出し、次の時代へと引き継ぐことが大切だと思っています。

こうしたことは、短兵急に結果が得られるものではなく、多くの苦難の連続を乗り越え、薄紙を一枚一枚積み重ねるような地道な努力の結果として、得られるものと認識しています。

これまで実施してきた各種マラソン大会や駅伝大会への参加の道程は、まさにそうした連続の中で、知的障がい者に対する差別や偏見

を打ち破る画期的なこととなったと同時に、知的障がい者に対する、本来の福祉とされている「生き甲斐保障」といえるでしょう。

## ほかにわレオクラブ結成

その延長線上の事業として、昨年は口加ライオンスクラブのスポンサーによって、「ほかにわレオクラブ」の結成に漕ぎ着けました。このことは新たな価値の創造であり、これまで知的障がい者に対するサポート役として、地元小学生・中学生・高校生とが連携することは、共に奉仕する組織としてのレオクラブの結成によって、地域における認知度を高め、誇りを持って行動できる環境づくりの推進が可能となったのです。

つまり、スタッフ個々が法人の理念を理解し、それを共有し、目的達成のため、モチベーションを高めることは、今自分のできることは何か、常に問いかけてながら実践する姿勢こそが福祉文化に近づく道であろうと、思っています。

先輩諸氏の指導を仰ぎながら、目的達成のため研鑽を重ねていきたいと思っています。

## もりだくさんの半日でした

関東ブロック現場セミナー

関東ブロック担当理事 長洲晃二

本学会は、異文化交流ともいえる程、会員の興味の幅がさまざま

ですが、今回は世代交流・複合施設・住民参加という、多くの人が関心

ハビリティと地域交流のための卓球療法（写真）。評価方法や様々な用具の紹介をした後、一瞬でうまく打てるコツやマシンを活用した実践など、体を動かした学びをしました。休憩時間には、デイサービス作

品の展示即売、本の販売のコーナーもあり、このたび出版された学会の本のPRにもなりました。見学・講義・演奏・実技・展示など、さまざまな方法で学習と交流ができた半日でした。

## 「スウェーデンから学ぶ福祉文化」

日本福祉文化学会福祉文化セミナー

福祉文化セミナー企画担当（本学会会長） 河東田 博

2010年11月13日（土）（10：00～17：10）、福祉文化セミナー「スウェーデンから学ぶ福祉文化」（於、立教大学池袋キャンパス14号館4階D401教室）が、立教大学社会福祉研究所の後援を得て、本部企画として行われた。司会者は島田治子理事、参加者は45名であった。

このセミナーでは、スウェーデン関連の3つのテーマ「スウェーデンの福祉文化実践から何を学べるか」（河東田）「スウェーデンにおける障がい者福祉と障がい児教育の実践から、福祉文化を考える」（福井大学教授・石井・バグマン麻子氏）「スウェーデンの福祉文化を日本に」（舞浜倶楽部総支配人・グスタフ・ストランデル氏）が設定され、各演者の講演と3演者による鼎談「スウェーデンと日本の福祉文化を語る」が行われた。河東田からは最近の「スウェーデンの社会・政治変動による福祉文化環境の変容が、石井氏からは現場のスタッフ教育の大切さについて、ストランデル氏からは舞浜倶楽部におけるスウェーデン福祉文化

実践が語られた。鼎談では3者が感じるスウェーデン人気質やスウェーデン福祉文化事情が各人の体験を通して語られた。全体に共通するキーワードは、「平和」「人権」「愛」だったように思う。以下参加者アンケートの一部を紹介し、セミナーの報告とする。

「3つのテーマと鼎談が巧みに構成されたよいセミナーだった。」「共通する部分、一人一人の主観に基づく実感をもたう部分があり、スウェーデンという国を通じて、今の自分に生かせそうな話がたくさんあった。」「教科書に出てくるスウェーデンはやはり良い例としてしか登場しない。生活していたからこそわかるスウェーデンの課題がとても印象的だった。客観視の重要性、本質を見ることが大切さを感じた。」「国に関係なく、福祉活動は簡単なことではない。発想をちょっと変えることにより、より良いものになる。スウェーデンの福祉文化の良い部分を取り入れていくともっと良い福祉文化が日本でもできると思った。」

## 日本福祉文化学会 第21回全国大会

# 長崎大会を終えて 感謝の言葉と報告

長崎大会事務局長 志賀俊紀

日本福祉文化学会長崎大会を完走して、大会事務局を引き受けて、「なんとかそれなりに」無事終了したことに安堵しています。

参加者は78名でした。遠くは北海道、新潟などからお越し頂き感謝致しています。また会員外の方も多く参加頂きました。内容が良かったので学会に加入したいと申し込まれる人もあり、その場で河東田会長と名刺など交換されており、和気藹々した長崎大会のコンセプトの一つ「おもてなし」の場になりました。

大会の内容にしましては、既に会員の皆さまに「大会要綱」が資料で配付されており、本学で割愛させて頂きましたが、本学会初代会長一番ヶ瀬康子先生が長崎純心大学に「福祉文化の種子」を蒔かれ、その種子がどのように成長しているのかを検証する重要な意味を持つ大会でありました。

第一日目の午前中、原爆ホー

ム恵みの丘での被爆者自らの「被爆劇」は、平和を願うこの長崎だからこそ訴えられる尊い感動の時間でした。この取り組みは実践報告でも関係者より報告がありました。残念であったのは、大会事務局と学会本部の事務局同士の間で連携調整の不備で、会長はじめ理事各位が参加できなかったことです。

理事会も活発な議論をいただきました。日比野大会会長の挨拶に続いて、津曲大会実行委員長長の基調講演では、一番ヶ瀬初代会長の足跡と歴史的進化の状況を理解できる機会を得て、学会の研修・研究はスタート致しました。

記念講演、シンポジウム、実践発表、ポスター討論などでは一番ヶ瀬先生の薫陶をいただいた門下生（？）たちが研究者としてのエキスの部分を、参加の皆さまと共に深められたことを実感しました。続く総会も無事終了致しました。

懇親会は56名の参加で純心



大学の学生食堂でいい雰囲気の中、和やかに盛り上がり、ゲスト出演はほかにわ共和国の通所者によるヘルマンハープの演奏でした。この大会のために始めたヘルマンハープの発表でしたが、初舞台で良い思い出をつくって頂き感謝しています。アンコールは長崎では「もってこい」「もってこい」といって盛り上げ役を長崎くんちでは「白トッポ」といいますが、地元参加者もより立ててくれ、「上を向いて歩こう」では大合唱になりました。

メは、来年度の大会開催地である大阪の石田さん、再来年の岡山の松原さん、そして今年の志賀ががちり肩を組んで歌などを歌い、長崎の名所「思案橋」界隈に流れてゆきました。

2日目の午前中は、研究発

表が熱心に討議されました。そして、お宝映像がテレビに映し出されますと、皆さん一瞬水を打ったような雰囲気です。「2007年九州地区福祉文化学会インほかにわ共和国」の映像に釘付けでした。敬愛する一番ヶ瀬先生のお元気な姿に接することができました。

午後の部では、島田治子さんとマリー寛子さんの担当で、研究と現場のワークショップが2つ開催され、6人の発表がありました。最後は大会会長日比野正巳氏の特別講演で全ての日程が終了致しました。

閉会式では学会賞を受賞された小羊会の施設長長谷川郁子さんの謝辞があり、大阪の石田さんから次期開催地の挨拶をいただき、来年の再会を約束して散会いたしました。

